



# 古代史と 電子書籍

川崎ゆきお

訪問好きな木下は、その日、竹中という無職者を訪ねた。訪ねやすいのはいつも部屋にいるからで、時間帯も土日祭日も問わない。そのため、訪問頻度が増えている。従って親しさも増しているのだが、友人関係が深まったわけではない。

竹中は少し古びたワンルームマンションに住んでいた。

「狭いからねえ」と、毎回竹中は言う。それまで住んでいた実家では二間を自分の部屋にしていた。それに比べると牢獄のように狭いのだろうが、この狭さに憧れていたようだ。

「どうだい」

「何だい」

「調子は」

「同じ」

「じゃ、何もしていないと」

「うん」

「何か目的を持ったら」と、木下はありふれた助言を入れる。その効果は全くないのだが。

「目的ねえ。日々のメニューの中で、メインだな。まっ、仕事をしていれば、会社なんかで、その時間を過ごす。メインを過ごす」

竹中は何度か働きに出たことはあるが、辞めている。

「それでね、部屋で、自宅、自室で出来るメインを考えている。今もそうだよ。だからやるべき事はやっている」

「そうだったねえ。で、最近は何をやってるのかな」

「まずは原理から考えてみた」

「原理か、それは凄い」

「メインを囿にするのがいい」

「え、囿」

「メインは囿でね。今、古代史の勉強をしている」

「それがメインなの。メインって仕事になるようなことじゃないの」

「そうだよ」

「古代史で食べていけるのかなあ」

「だから、これは囿だ」

「はいはい」

「これを一日のメインとする。つまり軸だ」

「それで？」

「古代史関連の本を読んだり、書きものをしている。しかし、すぐに飽きる。一日持たない。だから、休憩する。その休憩中に検定試験、資格試験だね。その本を読んでいる」

「非実用なものがメインで、実用がサブかい」

「サブにしたほうが気楽に出来る。これが原理だ」

「なるほど、考えたねえ」

「しなくてもいいんだ、サブはね。だから資格試験はしなくてもいいんだ。本当にしなければい

けないのは古代史の研究だ。その休憩で、しなくてもいいことをやる感じで資格試験の本を読む。これだよ。これ」

「しかし」

「ん、何」

「どちらも似たようなものかもしれないよ」

「何が、何処が」

「どちらも実用性がないと思うけど」

「資格を持てば就職に有利だろ」

「弁護士が出来る資格を持っていても、仕事がないらしいよ」

「そうか」

「だろ」

「しかし木下君。この原理のおかげで、日々効率よく、さらに充実している。これはどうなの。この実用性はいいじゃないか」

「まあ、そうだけど、それはこの部屋の中だけでの話だからねえ」

「まずは、この部屋からだ」

「はいはい」

「やらないといけないことをほどやりにくい。やらなくてもよいこと、またはやってはいけないことの方がやりやすい」

「その原理は分かるけど。サブの資格試験はやっていいことですよ。古代史の研究よりも就職に有利だし」

「それが少し気になり、修正が必要なんだ」

「遊びすぎた方が、勉強しやすくなるとも言いますがねえ。原理的にはそれじゃないかな」

「遊んでいる場合じゃないと、気合いを入れ直す瞬間、確かにあるねえ」

「気合いはすぐに抜け、また遊びたくなる」

「そうそう」

「古代史と検定ものだけど、題目を代えたら」

「古代史は好きなので抜けない。資格ものは交換出来る」

「資格ものはサブだったねえ。本当はメインだけど」

「そうだよ」

「じゃ、古代史だけでいいんじゃない」

「食えない」

「あ、そうか」

「じゃ、古代史の知識を利用した別のものをサブで作る」

「盗掘しかない」

「それは駄目だねえ」

「古墳マップをデータ化しているから、怪しい古墳が何カ所もある」

「駄目だよ盗掘は」

「しないけど、実用性と言えはその程度だ」

「じゃ、何ともならないねえ」

「古代史の研究をまとめて、本にする」

「ほう」

「電子書籍で本にして出す」

「あるじゃないか、きっちりとした世に問うシステムが」

「まあ、そうなんだけど、電書は売れないから食っていけない」

「そうか」

「まあ、いいや」

「そうだね。無理することないよ」

「ああ、上手い手があれば、もうやってるから」

「そうだね」

これは後日談になるが、竹中は古代史の本を電子書籍で個人出版した。  
一年で十七部売れた。買う人がいたのだ。

了